〔書評〕

坪内稔典編『現代俳句入門』

安森敏隆

坪内稔典さんとは、昔からよく話をしてきたものである。ともに、大学院で国崎望久太郎先生について学び、稔典さんは国崎先生から「正岡子規」研究を示唆され、私は「斎藤茂吉」研究を示唆され、今日まできたように思う。

ある時、対談か鼎談をしていた時、「一句の俳句」の背景にいる作者と、「一首の短歌」の背景にいる作者について話したことがある。私は「一首」の背景の作者について、おおよそ短歌の場合は、六、七割ぐらい実像と虚像を言い当てることができると言ったのに対し、稔典さんは「一句」の背景の作者について、おおよそ二、三割ぐらいしか作者の〈私〉の実像と虚像は言い当てることができない、と言った。

ははぁー、これが五七五七七の「短歌」と、五七五の「俳句」の形式の大きな違いであり、短歌と俳句の〈私性〉の違いであることを認識したことである。

稔典さんは「俳句の根拠」について「私は、俳句は過渡の詩だという言い方をしている。人間そのものが常に過渡として存在すると考えれば、俳句だけをことさらに過渡の詩と言う必要はない。しかし、俳句は、過渡の詩とみなすとき、つまり、人の存在の過渡性に即き、その過渡性にこだわり続けるとき、その存在の理由がもっとも鮮明すると思われる」（『俳句の根拠』静地社）と、常々公言している。すなわち、短歌の〈私〉が、作者の人格を一首の背後にしっかりと刻印するのに対して、俳句の〈私〉は、生きてある現在をジグザグしながら渡り、過渡なる人間として瞬間、瞬間に変形していく〈私〉を点描させて一句を完成させるのである。

まずは、本書の大きな四つの「目次」を示しておこう。

口承の文学――俳句とは何か（七～五〇頁）
乱反射――俳句の現在（五一～一〇〇頁）
はまなすの沖――時代と俳句（一〇一～一五四頁）
甘納豆とひな人形――句作の現場（一五五～一八六頁）

「口承の文学――俳句とは何か」では、俳句の特徴を「口承性」に置き「俳句の口承性は《これでも俳句か。でもなんとなく心ひ

かれるなあ》という句において、実は最も活力を帯びている。その口承性の活力に触れることが、なんといっても俳句の面白さであろう」と言っている。俳句の特徴を「口承性」に見、「歌謡」や「諺」や「格言」などの表現や俗語による発想を念頭に、「俳句とは何か」を面白く、わかりやすく論述している。

「乱反射――俳句の現在」では、四人の友人の論文――宇多喜代子「個の凍結とその時代――昭和四十年代の問題」、足立悦男「〈私〉の居ない場所」、仁平　勝「〈発句〉の変貌――切字論・序説」、夏石番矢「戦後俳句と西洋詩の交差――高柳重信と翻訳詩」の、優れて刺激的な俳句論を載せている。

「はまなすの沖――時代と俳句」は、昭和五七年から昭和五八年にかけて「日刊新愛媛」に掲載した氏の俳句を中心にして書かれた「時評」を集めたものである。最初の「祝祭的な言語空間」（昭和五七年一一月二二日）にもあるように、稔典氏の出身の〈伊予の俳句〉に言及しながら、俳句の交流の場について「明治期の麻生村のそのチラシによると、優秀句は、金刀毘羅宮へ奉納され、金蒔絵の盆、伊予縞、木綿、こうもり傘などが与えられることになっている。投句の取りつぎ所は、村の酒屋や紺屋であった。今日の各種のコンクールやスポーツ大会と同様に、俳諧の場は祝祭的なものとして人々に享受されていたのである」と、俳句の披講の現場が祝祭的な場と祝祭的な言語空間によって成り立っていたことを語り、単なる「時評」を超えた俳句論として、また高校生たちの「俳句甲子園」を推進していく実作者としての姿が彷彿してくる章でもある。

「甘納豆とひな人形――句作の現場」は、「三月の甘納豆のうふふふふ」等の自作を取り上げ、当時、六年生の愛娘が変形させて作った「三月のひな人形のうふふふふ」と比較したり、俳句の口承性や類型性や伝播性について言及したりしながら、俳人・稔典の日常を縦横に語り、句作の現場と俳句の読みの柔軟性を面白く披歴したものになっている。

この坪内稔典編『現代俳句入門』は、もともと私の愛蔵する本であるが、「あとがき」の日付が

「一九八五年二月二十日」

であり、いまより二十五年前のものであり、それから以降のロングセラーになって今回まで「版」を重ねてきている本であることを付記しておく。

最初に出版されたのは昭和六十年七月である。その後、「二刷」が平成三年八月、そして「三刷」が平成二十年八月（この時より並製本になった）で、今回のが「四刷」目に当たると思われるが、出版社か取次店の何らかの事情によって、この四刷りについても「後付」に明記されていないのが、惜しまれる。

（平成二一年八月三日発行、株式会社仲積社、一八〇〇円＋税、一八七ページ）

（やすもり・としたか　同志社女子大学教授）